

## 名古屋市立大学人間文化研究所 10 周年「記念講演」

12月5日14時から滝子キャンパス201教室において、表題の講演とシンポジウムが開催された。郡健二郎学長の挨拶のなかで、吉田一彦教授と私が編集した『名古屋の観光力』を紹介してもらい嬉しかった。2年ほど前に刊行直後の本を先生にお送りしたところ、丁寧な礼状が届いたことを思い起こした。

記念講演の講師は名古屋ボストン美術館館長で俳人・評論家の馬場駿吉氏で、テーマは「美術は身体にどう向き合ってきたか—古代から現代まで」である。馬場氏は名古屋市立大学医学研究科耳鼻咽喉科の元教授で、現在、名誉教授である。郡学長からも、教授時代の馬場先生の思い出が語られた。

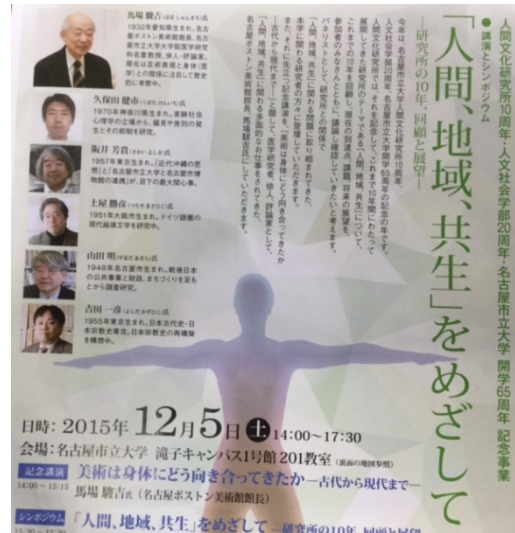
講演は原始美術から始まり、古代ギリシャ・ローマ、中世、ルネッサンス、近現代へと進んでいった。「社会と身体」や自画像・肖像画なども興味深かった。美術館で見た絵画もいくつかスライドに登場して、時間を忘れるほどであった。「身体と肉体」のなかで、耳や口についての話も印象に残った。

写真のスライドにより、講演が簡潔にまとめられた。「人間(身体)」を真中に、「哲学・倫理・宗教」、「科学(医学)」、「芸術」がそれぞれ相互に関係づけられている。人間(身体)を中心に、なかなか示唆に富む「概念図」だ。美術と身体をテーマにした話であったが、それ以上に奥深いものを感じた。また、講演をつうじて、絵画を見る目が養われたようだ。

休憩をはさんで、シンポジウム「人間、地域、共生」をめざして—研究所の10年、回顧と展望に移った。体調を考え、私が報告のトップバッターを務めさせてもらった。テーマは「名古屋と観光—歴史・文化・まちづくりからのまなざし」である。入院前に送付した報告要旨を次ページに掲載しておく。

シンポジウムには京ちゃん一家も来てくれた。とにかく嬉しかった。質疑の時間に、京ちゃんお父さんがフロアから「インクルージョン」などについて発言した。私もそれに応えて、先ほどの「概念図」と関わらせて、京ちゃんから学んだことなどを話した。

(2015年12月7日)



## 名古屋と観光—歴史・文化・まちづくりからのまなざし

2015・12・5 山田 明

◇「人間・地域・共生」をキーワードにした人間文化研究所が10周年を迎えたことは感慨深いものがある。研究所設立は大学「法人化」の動きの中で推進されてきた。研究所5周年記念シンポジウムでは、長野県泰阜村・松島貞治村長の「安心のむらは自律のむら」と題した記念講演に続き、「持続可能な社会」をテーマにパネルディスカッションを行った。ここでは、研究所を中心に取り組んできた「観光研究プロジェクト」について時期を追って、研究教育の一端を紹介していきたい。

◇「法人化」1年目の2006年後期から総合科目「名古屋と観光」を開講した。前期から講義準備のための研究会を何回か重ねた。予想を大幅に超えて、201教室が超満員になるほど盛況であった。前年度から始まった授業公開制度により、20数名の社会人も熱心に受講した。講義は専門を異にする6人の学部教員、非常勤講師として招いたJR東海相談役の須田寛先生が担当した。とりわけ須田先生の「あつい講義」は好評だった。翌年3月には、講義ノートをもとに『名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光』という報告書を刊行して、数年にわたりテキストとして活用した。

◇「観光研究プロジェクト」は講義だけでなく、講演会・シンポジウムを大学の内外で開催してきた。まず2006年12月、東京大学の西村幸夫教授を招いて「歴史・文化・自然を活かしたまちづくりと観光」と題した講演会を201教室で開催した。2007年12月には、中区役所ホールで公開シンポジウム「名古屋の観光まちづくり」を開催した。大学と日本政策投資銀行の共催によるもので、300名近くの参加者があった。さらに2008年11月には、国際シンポジウム「観光まちづくりの国際比較—ペーチ（ハンガリー）と名古屋から考える」を学部棟1階会議室で開催した。公開シンポジウムや国際シンポジウムなどでは、名古屋市市民経済局から講師を招いてきた。名古屋市との連携を強める中で、「名古屋市観光戦略ビジョン」策定などにも関わることになった。名古屋市との連携は現在も続いている。



◇8年にわたる研究・教育の成果として、2013年9月に『名古屋の観光力—歴史・文化・まちづくりからのまなざし』を刊行した。講義担当者だけでなく、学部・大学院の学生・修了生も執筆に加わった。本書は名古屋のまちづくりや観光に関心のある多くの人に読まれ、「名古屋と観光」の講義テキストとしても活用している。研究所マンデーサロンなどで報告会を行った。『東海社会学会年報』第7号、2015年6月に、詳しい書評が掲載された。



こうして人間文化研究所の共同研究プロジェクトとして観光研究を進めてきたが、2014年からは新たな歩みを始めつつある。これからの期待したい。